

イザヤ書 2 章 10-17 節

ローマの信徒への手紙 6 章 3-11 節

マタイによる福音書 10 章 34-42 節

本日の福音書にあるイエス様の言葉「私が来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思ってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。35 私は敵対させるために来たからである。」(10:34-35)は、そのまま受け取りますと、深く戸惑ってしまいます。類似する言葉が、ルカによる福音書にもあります。

「私が来たのは、地上に火を投じるためである。その火がすでに燃えていたらと、どんなに願っていることか。～あなたがたは、私が地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言うておくが、むしろ分裂だ。」(ルカ 12:49、51)です。これらの言葉が、イエス様ご自身の言葉であるのか、それぞれの福音書を記した教会が、イエス様の意思を継いで書いた言葉であるのか、判別は難しいです。しかし、そのどちらであっても、確実なことがあります。それは、イエス様もマタイ福音書あるいはルカ福音書に関わる教会も、剣(武力)、あるいは火を用いて自分の宣教活動を行うようなことはなかったということです。自分たちの目標達成の手段として、暴力も肯定される、イエス様がそのように語っている、その根拠がここである、と主張するならば、全く筋違いです。

それでは、イエス様は、これらの言葉で何を言おうとされているのか、そう考えますと、「**こうして、自分の家族の者が敵となる**」という言葉が、その答えのように思えます。『聖書(旧約)』の世界では、家族が社会の基礎です。それは現代の様々な文化圏でも同じかもしれません。結論として、イエス様はその家族を根本から崩すようなことを語っているように思えます。しかし、イエス様の言葉はここで終わりではありません。「**また、自分の十字架を取って私に従わない者は、私にふさわしくない。自分の命を得る者は、それを失い、私のために命を失う者は、それを得るのである。**」(10:38-39)と続きます。「十字架を取る」は、ほぼ直訳ですが、意味していることは、十字架の道を歩まれたイエス様を信じ始めるということです。それゆえに、イエス様は、信じながらも、イエス様と同じように歩まないならば、「ふさわしくない」としているのです。「ふさわしくない」とは、外的な資格や素材ではなく、その内容的な価値や分量から考えて、適切ではないという意味です。それが、ここでイエス様が語ろうとしている内容です。

そのように考えますと、これらの言葉は、マタイ福音書において5章から7章でイエス様が語った、いわゆる山上の説教の言葉を前提としていることがわかります。山上の説教でイエス様が語られた内容は、キリスト教倫理の基礎と考えられますが、それぞれが実行することが困難なほど、徹底した内容です。そして、その内容をどのように解釈するかは、解釈者によっても異なります。しかし、ひとつ言えることは、マタイ福音書を読んでいた人々は、それを実行しようとして

いたということです。

ただし、この場合も気を付けなければならない点があります。マタイ福音書は、イエス様の語った山上の説教の内容を、そのまま一般社会に当てはめようとはしていないということです。イエス様に従う人々の間、つまり教会の中で実践しようとしていたということです。もちろん、イエス様も、マタイ福音書を大切にしていた人々も、教えを教会の中にのみ限定しなければならないと考えていたわけではないでしょう。しかし、最初に教会がそれを実践し、教会が模範となり、世界に示そうとしていたということです。

この構造は、主なる神様がイスラエルを選び出したことと同じです。主なる神様は、ご自身が創造されて、良しとされた世界が崩れたとき、すべてが元に戻るために、イスラエルを選び、模範となさいました。それゆえ選ばれたイスラエルには、主なる神様の命令に従い、その方のみがもっとも聖である方であることを示す使命があります。現在もその使命は続いています、マタイ福音書にかかわる人々は、その役割は、教会こそが担うと自負していました。そして、教会の交わりの中で、イエス様の示して下さった愛に基づいて、主なる神様が与えられた律法を、ユダヤ人以上に徹底して実践して、この世界の模範となる、そしてその教えを世界に広げ示すことを使命としていたのです。そのような前提で改めてイエス様の言葉を考えるとき、その刺激的な響きは、わたしたちの目標を明確にする響きとなります。

世界には、様々な平和があります。そして平和の意味や内容は、その定義の仕方によって変わるといえます。平和を求めるからこそ戦いになるといえます。イエス様の時代、周辺世界で最も有力な勢力であるローマ帝国は、安定した時代に入りました。その意味では、マタイ福音書が書かれた時代、ローマの市民たちにとっては、平和が続いていたといえるでしょう。もちろん、イエス様とマタイ福音書は、ローマ帝国を特定して批判しているわけではありません。主なる神様を聖なる存在として置かないで、人間が他の人間を支配している状態の平和を批判しているのです。その支配する側には、指導者的人物、体制、文化、思想、イデオロギーなど、人間が作り上げたものすべてが含まれます。どのような素晴らしい何かであっても、人間が作り上げたものである限り、それだけは別格で尊いというものは存在しないのです。つまり平和を作り上げないのです。

そのように考えるとき、イエス様が語っておられることとは、今誰か一人でも悲しんでいる人がいるのであれば、その世界は平和ではないということです。言い換えれば、天地創造の最初に神様が「良し」とされた世界以外、真の平和ではないということです。だから、イエス様の望むのは、その平和ではなく剣なのです。そのような平和がいつ実現するのかわかりません。しかし、だからこそ、その平和を教会が目指さなければならないのです。いま、世界の各地で残念ながら悲しい戦いが続いています。だからこそ、まことの平和の実現となるような歩みを、教会が試み続けることが大切なのです。わたしたちの歩みが、いつの日か、真の平和の実現につながることを願いつつ、これからも歩みたいと思います。